TADOKU JUNIOR　はじめての名作童話　★★★☆☆ ふつう　341語

The Golden Key

金のかぎ

Katharine Pyle（1918年の本）　原文そのまま　朗読：Lydia

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　雪の森でたきぎを集めていた男の子が、金のかぎと、ふしぎな鉄の箱を見つけました。箱の中から小さな声がして……。さて、中には何が？



It was winter, and a little lad had gone out into the forest to gather wood to keep the fire going at home. As there was snow upon the ground he took his little sledge with him, for he could carry home a larger load on the sledge than on his back.

He gathered together a heap of fallen branches, and then piled them neatly on the sledge, putting the larger pieces at the bottom. Before he had finished the task his fingers were almost frozen, for he had no mittens. “Before I start to drag my sled home,” said he to himself, “I will build a fire and warm my hands a bit.”

He took a stick, and cleared away some of the snow, so as to have a place to build the fire. When he had done this he saw a little golden key lying there on the

ground. The little lad picked it up, wondering. “Wherever there is a key, there must be a lock,” he said.

He began to scrape away the earth, and presently he found a curious looking chest made of iron inlaid with silver. There were words written on the lid of the chest, but the little boy could not read them.

He lifted the chest out from the earth, and it seemed to him that something was stirring inside of it. Then a little thin voice, as thin as a thread, cried to him. “Let me out! Let me out, and I will make your fortune.”

The little boy was very much surprised. The chest seemed too small for any living being to be in it.

“Who are you?” he asked.

“Open the chest and see. If you will only let me out you will never be sorry.”

The little boy put the golden key in the lock and it fitted exactly. He turned it round and the lock flew back. But as to what was in the chest you will have to wait until he lifts the lid before you can see.

冬のことでした。小さな男の子が、家の火をたやさないように、木を集めに森へ出かけていました。地面には雪がつもっていたので、男の子は小さなそりを持っていきました。せなかにしょうより、そりのほうがたくさん運べるからです。

男の子はおちているえだをひと山集めて、大きいのを下にして、そりの上にきちんとつみました。しごとがおわらないうちに、男の子の指はこおりそうになりました。手ぶくろを持っていなかったのです。「そりを引いて家に帰る前に」と男の子はひとりごとを言いました。「火をたいて、少し手をあたためよう。」

男の子はぼうを持って雪を少しどけ、火をたく場所を作りました。そうしてみると、そこの地面に、小さな金のかぎがおちていました。男の子はふしぎに思いながら、かぎをひろいあげました。「かぎがあるなら、きっとじょうもあるはずだ」と男の子は言いました。

男の子が土をほりはじめると、まもなく、鉄に銀をはめこんだ、めずらしい箱が出てきました。箱のふたには何か字が書いてありましたが、男の子には読めませんでした。

男の子が箱を土の中からもちあげると、中で何かが動いているような気がしました。すると、糸のように細い小さな声が、男の子によびかけました。「出して！ここから出してくれたら、きみをお金持ちにしてあげる。」

男の子はとてもおどろきました。箱は、生き物が入っているにしては小さすぎるように見えたのです。

「きみはだれ？」と男の子はたずねました。

「箱をあけて見てごらん。出してくれさえすれば、ぜったいにこうかいはしないよ。」

男の子が金のかぎをじょうにさしこむと、ぴったり合いました。かぎを回すと、じょうがパチンとひらきました。でも、箱の中に何が入っていたかは、男の子がふたをあけるまで、待っていなければわかりません。

たんご と クイズ 金のかぎ

snow 雪	sledge そり	mittens 手ぶくろ
fire 火	key かぎ	chest 箱
lock じょう		

Q1 男の子が雪の下で見つけたものは？

① 金のかぎ　② 銀の指わ　③ 小さなそり

Q2 箱の中から聞こえたのは、どんな声？

① 大きなどら声　② 糸のように細い声　③ 鳥のなき声

Q3 箱の中の声は、出してくれたら何をすると言った？

① 森の道を教える　② 火をたいてあげる　③ お金持ちにしてあげる

こたえ

Q1 ① 火をたく場所を作ろうと雪をどけると、小さな金のかぎがおちていました。

Q2 ② 箱の中から、糸のように細い小さな声が男の子によびかけてきました。

Q3 ③ 糸のように細い声が、「出してくれたら、きみをお金持ちにしてあげる」と言いました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #49001（Katharine Pyle、1918年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Lydia（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは 3 重チェック。人の目でも順次確認しています。